

## 気仙沼復興豆腐

～ 被災地支援の取組みから ～

東京支部城北支会

千種 伸彰

### ●要約

すべてを流された——。気仙沼の豆腐製造業・支援プロジェクト。マサキ食品当主の千葉淳也さんは、ラッパを見つけて、8カ月の歳月を経てお店を再開する。対話を重ねて、再建への気持ちを高め、目指すべき方向を模索した。

### 1. 支援までの経緯

宮城県気仙沼・松崎片浜。地元の人々は「片浜」という地区。小高い所を除いてほぼ全滅。津波があらゆるものを押し流した。マサキ食品、五代目当主・千葉淳也さんは、店も家もすべてを失った。震災前は地域の人々向けにお豆腐を製造し販売していた。遠くを見渡すことのできるこのガレキだらけの地域が、かつて家や店舗が立ち並び人々の営みがあった空間であったとは想像ができない。



2011年3月11日、大きな揺れが続いたあと千葉さんは写真左手奥の小高い山をよじ登って避難をした。押し寄せる津波を見下ろしながら、この津波に多くの人々が飲み込まれているだろうと想像をした。気の毒に思うと同時に、「自分は助かった」と感じた。その瞬間、恐怖が込み上げてきたという。



千葉さんは約1カ月にわたって水も電気もない中で暮らした。日が昇ると起き、日が沈むと暗くなるので寝るという生活を続けた。ある意味で原始的な生活を送るなかで人生観が変わった。シンプルな生き方の大切さに改めて気がついたという。



水が引いた後、思い出の品、貴重品など何かがあるのではないかと片浜地区を歩いた。

そこで、千葉さんは、奇跡的に豆腐屋のラッパを発見する。

「ラッパを吹いたら鳴ったんです」。あきらめかけていた再建。この出来事で豆腐を作れと運命的なものを感じたという。

何もかも失ってしまった。ゼロというよりは、マイナスの状況。千葉さんは再建への強い意欲を持っていた。私は、どこまで出来るかということよりも「助けたい」と思った。始めて出会った日に支援を申し出た。7月下旬、こうして支援プロジェクトが始まった。

## 2. TEAM 気仙沼復興豆腐の結成

ヒトを除くすべての経営リソースが失われている。あらゆるものが足りないわけだから、何を準備しても助けにはなるだろう。しかし、安易な支援は、迷惑になるかもしれない。千葉さんにとって継続的に必要なことは何か。そして、私自身が無理なくお手伝いできることは何か。そのことを把握することから始めることにした。

同時に次のことをイメージした。マサキ食品をよく理解したコアとなる支援者をつくること。私一人ではなく、チームをつくること。支援者が現地を訪れ、見る、伺う。その中から課題を見つけし、物心ともに支援ができる体制を思い描いた。結果的に対話を重ねた事が、後々の企画立案や具体的な取り組みに役に立った。

支援チームをつくった後に、SNS を活用して継続的に対話ができる関係を構築する。支援者は、やがてお豆腐が完成したあとに熱烈な支援者として情報発信をしてくれるに違いない。

現地視察の支援ツアーを企画した。新しくつくったホームページや facebook を活用して、参加者を呼び掛けた。その呼び掛け文は次の通り。

### 気仙沼・復興どうふ支援視察について

津波や放射能の問題で、被災地は疲弊しています。出来ることは小さなことかもしれませんが、そのことで何かのお役に立てればうれしいと思っています。千葉さんは工場、店、ご自宅も流されてしまいました。その中からの復興です。その様子を伺いに行きます。気仙沼の今を見て、千葉さんと語ります。交流会では、ご参加いただいた方々のお知恵やアイデアをいただきたいと思っています。

このように、参加者にも多くのことを求めないようにした。行く、交流する、アイデアを出す。千葉さんや復興にとって必要なアイデアを出すことを目的とした。これなら、どんな人にも参加が可能だ。

### 3. 基本コンセプトの作成

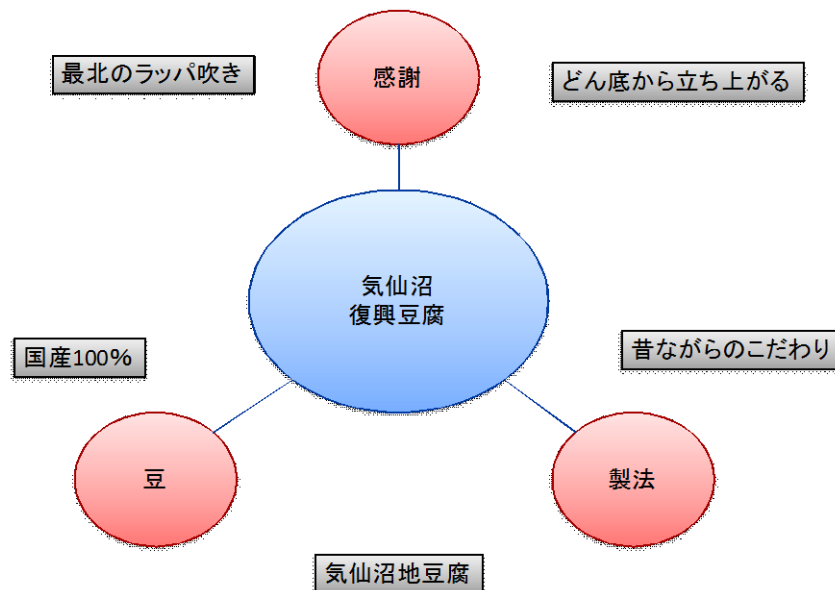
一泊二日の支援ツアーを企画した。千葉さんが被災をした片浜地区だけではなく、気仙沼港、モニュメントとして保存が決まった「第十八共徳丸」のある鹿折唐桑駅、そして、「奇跡の一本松」が立っている陸前高田などを視察することにした。支援者とは言え10人もの見ず知らずの人を受け入れ、2日間にわたって対応しなくてはならない。そうした経験をしたことのある個人事業主はまずいないだろう。時間も限られている。ハードルは低いが目的をもったツアーにすることが重要だと考えた。千葉さんと参加者に対して、復興ツアーの基本コンセプトを知らせて、ある程度納得してもらっておく必要があると考えた。ツアー開催前に、東京と気仙沼を往復した。東京でも泊まり込みで打ち合わせをした。千葉さんと何度か対話を重ね、次のようにまとめた。



#### ◆ 「気仙沼 復興豆腐」基本コンセプト

8月の時点で作成した「気仙沼 復興豆腐」のコンセプトです。皆さんと一緒にブラッシュアップをして、千葉さんに参考にしていただこうと考えています。

- ①千葉さんは「最北のラッパ吹き」です。気仙沼でもう一度、豆腐ラッパの音を響かせたい！
- ②家も工場もお店も流されました。そこから立ち上がることは、被災者へ勇気を与えることに！
- ③気仙沼にこだわる。昔ながらの製法で、安全安心そして美味しい豆腐を感謝をこめて！



この基本コンセプトを共有してもらいつつ、ツアーの目的、獲得目標を設定した。多くを求めず、しかし、被災者である千葉さんのニーズを満たすように。被災者・支援者が現場を見て、お互いを理解する。ひざを突き合わせてアイデアを出せるようになるということは、継続的な関係性が生まれるだろうと期待をした。交流会やブレストは次の内容で進めた。

交流会では、自己紹介をし合って「TEAM 気仙沼 復興どうふ」を結成します。  
参加者全員で、アイデア出しをします。



- ①千葉さん、マサキ食品が元気に立ち上がるにはどうすればよいか？
- ②気仙沼、被災地が元気になるにはどうすればよいか？

商品企画やプロモーションの提案など何でも構いません。出てきたアイデアから千葉さんに気づきが、きっとあるはずです。そのアイデアや気づきを今後の復興に役立てていただきます。

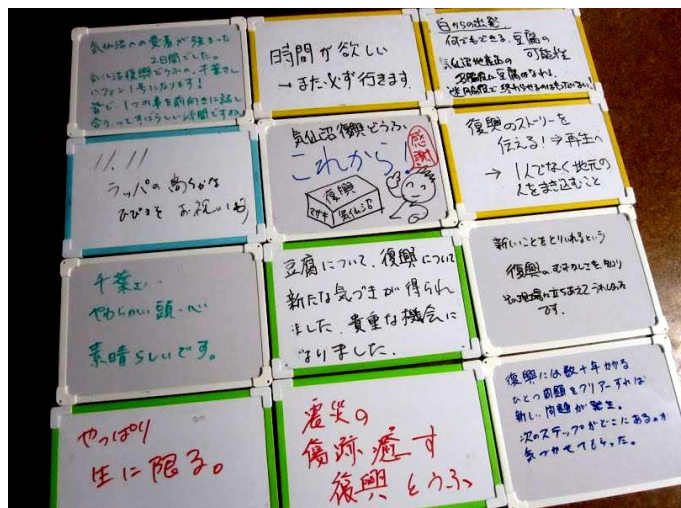
③私たち TEAM 「気仙沼 復興どうふ」 にできることは？

ブログやfacebook で「気仙沼 復興どうふ」の感想を書く、そんなささいなことから気仙沼へ訪れる観光客が増えるかもしれません。できることはいろいろとあると思います。楽しく、参加できる仕組みも考えてみましょう。参加者が地元に戻って、何か、続けられる事を確認できればと考えています！

#### 4. 被災者と支援者の共同作業

視察、語り合い、ブレストは一定の成果が得られた。多くのアイデアが生まれ、その中のいくつかを千葉さんは採用した。何よりも交流のなかから千葉さんのなかで気づきや発見があったようだ。例えば、電気を使わない昔ながらの製法。避難生活から感じ取った気持ちも込められている。今回のツアーは参加者の熱い気持ちを引き出すこともできた。

一連の活動を通して千葉さんの復興も、被災地の復興も、日本の再生も、つながっているのではないかと思えた。被災者も支援者も立場は違うが、同じ目的に向かってることを共有できた。多くの意見やアイデアが出た。ツアーを企画するために事前に打ち合わせをした方向性に肉づけされる形となり、主催者としてうれしいと思うと同時にほっとした。



## 5. 対話は続く

TEAM 気仙沼復興どうふのメンバーは Facebook を通して今も対話を続けている。従来製造していた豆腐に加えて、原材料にこだわり釜ゆで方式の商品開発を進めている。商品名は「気仙沼復興豆腐」。試作品の試食、感想などの書き込み、商品コンセプトや機器に関連する相談をしている。

ホームページを通して全国から募金を集めた。千葉さんは、震災を忘れないために、そして感謝の気持ちをあらわすために募金を使って看板を制作した。小さなアイデアだが一つ一つ「復興」に向かっている。



※出典、参考文献

気仙沼復興どうふ

<https://sites.google.com/site/fukkoutoufu/>

気仙沼 復興どうふ | Facebook

<http://bit.ly/yL90d0>

千種伸彰.biz : 気仙沼に行ってお豆腐屋さんを支援しませんか？

<http://www.chigusa.biz/archives/4939153.html>